

	[5]
氏名	あぶどうる まれっく Abdul Malek
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	博第 491 号
学位授与の日付	平成 28 年 9 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	Alluvial Land Reclamation Process of Bangladesh with Special Reference to Historical Geography, Geo-politics and Environment since the Colonial Rule
論文審査委員	主査教授 野間 晴雄 副査教授 伊東 理 副査教授 芝井 敬司 専門審査委員 溝口 常俊（名古屋大学名誉教授）

論文内容の要旨

目的と課題

ベンガル沖積低地はガンジス川、ブラマプトラ川、メグナ川が形成する世界最大のデルタ（三角州）である。現在の国でいえば、バングラデシュとインドの西ベンガル州にまたがる。本研究の目的は、このベンガル沖積低地の 19 世紀以降現在までの開発過程を、その東側 3 分の 2 を占めるバングラデシュを中心に景観復原や環境と人間活動の関わりを究明する、歴史地理学的手法と、住民・地主の土地争いにかかわる事件史のオーラルヒストリーの 2 つの手法で解明することである。

分析のために用いる資料は、1) バングラデシュ国立文書館と西ベンガル州文書館、県（district）の収税文書室等の一次史料と、2) 筆者自身によるフィールドでの聞き取り調査、3) 公刊・未公刊の報告書、当該地域の博士論文、新聞記事などの二次資料である。

とりわけ、1) では、英領期（18～19 世紀）の農業、経済、租税、土地制度、地方行政にかかわる公的機関の往復文書や調査報告書などの索引を作成することから始め、史料を読み込んでいった。またインド副総督の議事録（proceedings）や、東ベンガル州政府の様々な部署の議事録も参照している。さらに Ratan Lal Chakraborty と Haruo Noma が編纂した *Muhafezkhana* と呼ばれる県レベルのノアカリやコミラ、マイメンシン旧県の文書（JICA Bangladesh : 1987、1989、1990）の史料を十分に活用していることは特記される。

また、2) のフィールドデータとの結合では、自らの職務である法支援 NGO 活動で集めたノアカリ（Noakhali）県のチョール（char）とよばれる新しい河成堆積地に住む土地なし農民の貴重なオーラルヒストリーの分析が中心となっている。チョールとは、砂州、川中島、滑走斜面のポイントバー（寄州）、砂・シルト質からなる河口、沿岸の低平

な島などまでも含む、広範な土地の形状に関する概念である。堆積（alluvium）と侵食（diluvium）が同時並行的に起こっている不安定きわまりない生活の舞台となる沖積地形である。

論文内容

本論文は以下の7章と、「はじめに」、「結論」の9つの部分から構成される。

はじめに

第1章 バングラデシュを中心としたベンガルデルタの河道変化

第2章 ベンガルにおける開拓過程概観

第3章 バングラデシュにおける地形区ごとの開拓過程

第4章 英領期の沖積低地の開拓過程

第5章 バングラデシュ独立後のチョールの開発過程

第6章 ノアカリ県の沖積低地開発過程：フィールド調査の成果から

第7章 土地なし住民とポリテックス：ノアカリ県のチョールの事例から

結 論

本研究における章別の内容と得られた知見を以下に列挙する。

「はじめに」は本研究の序論にあたるもので、ベンガルデルタの概観、対象地域に関する既往研究の文献レビュー、章構成、使用資史料の解説からなる。とりわけ氏が注目するのは、英領期から連綿と調査・研究がされてきたデルタの開発・開拓過程である。デルタを形成する河川網の変化（河道変遷）、それを引き起こす誘因となる洪水や地震、1769年の異常気象による大飢饉、その後の食糧難や人口移動などに注目する。とりわけ19世紀後半の急激なベンガルの人口増加は、この地域の未開墾地の開発・開拓によるところが大きい。S.イスラム（Islam）氏による4つの開拓様式の類型化を参考にして、新規開墾（*Noabod*）、チョールやビール（*Bil*）の開拓、シュダールバンの森林開拓（*Sundarban*）、デルタの地形・生態環境に適応したものであることが論じられる。

第1章はバングラデシュを中心としたベンガルデルタの東半分の特性をとその開発様式の特徴を論じる。毎年のように生起する河道変化は、災害と結びついてこの地域に特有のローカルな地政学（ゲオ・ポリテックス）を形成する。

第2章は英領期のベンガルデルタの開発史を概観する。そこでは農地の開発・開拓によって、植民地からの経済利益を最大化しようとするイギリスによるインド統治の実態が論じられる。飢饉、マラリアその他の疾病の蔓延による死亡率の増加、地域別人口分布の差、土地・租税制度の変遷、地域による土地制度・地主制度の違いなどがデルタ開発の要素としてあげる。ザミンダールを頂点として農民（*rayat*）までの中間土地保有者の多少も、開発過程の地域差に大きな影響を与えることに氏は注目する。

第3章は、バングラデシュの地形区ごとの開発過程の諸相の違いを詳細に論じる。氏は、①バリンド台地、②シュンダルバン、③ハオールとビール、④チッタゴン丘陵の4つの地形区ごとの開発史を比較しつつ論じる。①は更新世デルタが陸化した強粘土質の台地で、ボグラ県をその代表としてとりあげる。ブナやサンタール呼ばれる先住民族を

ベンガル人が雇って森林を伐採したが、長く土壌肥沃度の減退によって人口減少にみまわれた。②は、深いマングローブ林に被われたシュンダルバンは森林伐採と潮汐を利用した開拓で、18世紀後半以降に政府やベンガル人、イギリス人によって森林伐採による農地創出が進められた。③のハオールは、シレット旧県からマイメンシン旧県域にかけてひろがる広大な凹地で、雨季にはほとんどが水面となり、雨季1期作に甘んじた低生産稲作地域となっている。ビールは広大な湿地で、ボアール (Boar) と呼ばれる旧河道、潟湖などの低窪地の地域名称である。ラッシャヒ旧県からパブナ旧県にまたがるチョーロンビール (Chalan beel) がその代表である。泥土からなり河川から雨季には水が流入する水域であるが、乾季には干上がる。鉄道建設による土盛、堤防建設が土地生態環境を変えたことに注目する。④は東北部丘陵地の開拓で、*jum* と呼ばれる焼畑耕作がモンゴロイド系少数民族によってなされた。

第4章は19世紀以降の英領期の東ベンガルの開発過程を人口/土地比や1858年、1868年の改正ベンガル沖積地法 (Alluvial Act)、1885年のベンガル借地法 (Tenancy Act)、1920年の沖積地法などの諸法令に焦点を当てて、チョールの開拓を論じる。

第5章では、1947年にインド、パキスタンの独立以降、1971年のバングラデシュ独立を経て、沖積低地の開発に、土地なし農民がいかに包摂されていったかのプロセスが、歴史地理学、地政学、環境条件から分析される。

第6章はアクティブデルタの典型といわれるノアカリ県のチョールの開発を、土地なしモスリム農民の移住と生存のための戦略、急激な人口増殖メカニズムの分析、稲作や水域での漁業の実態、地主と土地なし農民との葛藤過程、悲惨で貧しい地域の生活状態や婦女誘拐・幼児婚などの負の側面を、在地史料や国立文書館の史料分析から描き出す。

第7章もノアカリ県のチョールを事例に、筆者の土地なし農民への丹念なインタビューデータと、政府の広報局 (Public Department) に保管された1971年バングラデシュ独立後の新聞記事をもとに、土地開発と不可分にむすびついた現在のポリティクスを論じる。筆者が属するNGO、BLAST (バングラデシュ法支援トラスト) で実施したチョールの土地なし農民への調査と支援経験が大きく分析に影響している。政府は1990年代以降、チョールのサイクロン・高潮による減災を目的として植林を行なう。そこに展開する外部者による不法伐採、その後の独善的・暴力的な土地の囲い込みによるエビ養殖池造成や土地紛争に関連する訴訟事例、腐敗した地方役人や警察とギャングとの癒着をビビッドに描き出す。そこで絶大な権力をふるうのがバヒニ (*bahini*) と呼ばれるごろつきの梟雄^{きょうゆう}集団で、バヒニ同士の政争やその配下への土地ないし移住者の取り込み、ラティアール (*lathial*) と呼ばれる用心棒などによる理不尽な居住地焼き討ちや追い立て行為などが明らかにされる。

このようにチョールの新開地は土地の肥沃度は高いが、つねに侵食や水害・高潮や塩害にさらされた不安定で変転きわまりない土地である。おまけにそこは、梟雄集団の暴力装置の震源地であり勢力拡大地となっている危険きわまりない地域でもある。

「結論」では、以上の7章を要約して再説する。

論文審査結果の要旨

本論文は、広義のベンガルデルタの開発過程をその地形区ごとの開発様式の差違に注

目し、侵食と堆積が常に繰り返されるチョールという沖積低地の最前線で生起する開発過程に焦点をあてて、そこに居住する住民（多くは移住農民とその家族）の土地をめぐるポリテックスについて、歴史資料とフィールドでの聞き取りデータをむすびつけたバングラデシュ人による本格的な歴史地理学研究である。

扱う時期は、デルタの地形発達といった地史的時間から現代までだが、とりわけ英領期からバングラデシュ独立（1971）年を経て現代までが中心となっている。

第1章から第5章までが前半にあたり、歴史研究や生体環境を論じている。第6～7章の後半は、自らのNGOとしての実践活動の経験を活かしたフィールドワークによる聞き取りデータが中心となる。ノアカリ県のチョールの開発過程とそこに生起するポリテックスについて、土地生態環境の変化、開発行為の変化（農地からエビ養殖池への変貌）によって、バヒニと呼ばれる地元のごろつき暴力集団による土地囲い込みの実態プロセスが鮮明に描かれる。チョールが1990年代以降、エビ養殖という外貨獲得の最前線となって以降の環境変化を在地のポリテックスと関係づけて論じているのは卓見であり、かつ氏のオリジナリティが存分に発揮された部分となっている。

本研究の意義を要約すると以下の4点に集約できる。

- 1) 英領期から現在までのバングラデシュの沖積低地の開発史を、国立文書館等の一次史料や各種の二次資料、土地に関する諸法令、土地開発、村落支配、地方行政、農業などに関わる報告書や統計の分析から、ベンガルの歴史地理学と農村史の一面を、包括的に鋭くえぐり出したこと。
- 2) 沖積地開発の様式や技術の地域差を、土地生態の差違と結びつけて、バリンド、シュンダルバン、ハオールやチョールの低窪地、丘陵部の焼畑耕作の4類型で詳細に比較して論じたこと。
- 3) 沖積低地開発の最前線であるアクティブデルタ地域におけるチョールの開発とその理不尽な搾取社会の実態を、過去の村落調査報告、新聞記事の通覧、自らNGOとして関わった事例から分析して、その真相に迫ったこと。
- 4) 経済のグローバル化、商品化の進展によるチョール社会の変貌を、エビ養殖による土地囲い込みとそれに伴うさまざまな掠奪、焼き討ち、暴力の実態とむすびつけて、あぶり出したこと。

公聴会では、専門審査委員や副査やフロアから、英領期ベンガルの飢饉の実態の説明とその影響、チョールにおける日常生活、とりわけベンガル農村社会で顕著な定期市（*hat*）の有無について質問があった。

チョール自体が常にデルタ成長の最前線で拡大傾向にある新開地であるため、インフラ整備が十分でなく、道路も未発達で多くは未舗装である。そのため地方行政サービスの末端への浸透がきわめて不十分で、しかも地方役人や警察と地元で根を下ろした無頼漢集団との癒着がはなはだしく、無法地帯と化している地域も多い。定期市はその分布は粗であるがみられる。ただし住民の定期市へのアクセスは十分でない。また、チョール地域では、チッタゴンやダッカの大都市、ポリシャル、ノアカリなどの地方中心都市

への男性労働力の通年出稼ぎが恒常化しているが、農業労働やエビ養殖の作業員以外の就業機会ほとんどなく、現在バングラデシュの経済発展を支える女性の縫製業といったフォーマルセクターへの就業機会も皆無である。

また地政学（geopolitics）という用語について、一般には国家学、国際関係学としての側面が強いが、本稿での用語法は少し異なるのではないかという意見が副査からあった。それに対してマレック氏は、よりローカルなスケールでの地理的条件と地域政治の関係を論じるキーワードとして使用したことを説明した。

論文の構成として課題を残したのは、特殊な開発形態としてのバリンドやシュンダルバン、チョール、ハオールなどに重点が置かれすぎて、ベンガル沖積低地開発のもっとも典型的な氾濫原（flood plain）の開発に関する記述が少なくなってしまうことである。そのため、デルタ開発の全体像がやや模糊として提起されたことがあげられる。

また5章までの歴史記述・分析と、6～7章の実態分析のスタイルを融合したより密度の濃い記述がほしかったことにも言及しておきたい。とくに後半での数多くのチョールのデータ記載は貴重ではあるが、その社会構造分析を視野にいれた記述や考察が不足していることは悔やまれる。しかし、独学で歴史地理学的な分析方法や視点を学び、地図や統計を多用する記述スタイルをとったことは、歴史論文としては白眉である。地図の表現法を学び、オリジナルな主題図があればなお説得力を論文にもちえたであろう。

マレック氏はダッカ大学で歴史学を専攻し、大学院修士課程まで修了したが、その後は、BLAST（Bangladesh Legal Aid and Services Trust：バングラデシュ法支援トラスト）やRDC（バングラデシュ調査・開発集合体）の地域コーディネーターとして、国内の貧困・土地問題、女性・子どものエンパワーメント、少数民族の人権に対する支援などのNGOプロジェクトにかかわり、これまで多くの報告書執筆やセミナーを開催するなど現場の実践は積んできた。

その一方で、業務の合間をぬって、氏は国立文書館や図書館、県収税文書室などの原史料や新聞記事を広範に渉猟し、研究資料を収集してきた。その成果をインド西ベンガル州のビジャサガル大学の歴史ジャーナルをはじめ、ダッカ大学など、インドとバングラデシュの査読雑誌に発表し、英語4編、ベンガル語4編の論文を数える。その代表が、“Some Aspects of Alluvial Land Reclamation Process in Bangladesh”, Vidyasagar University: West Bengal, India, Vol. 1, 2012-2013, pp. 205-222) である。その他の論考も、多くはベンガル沖積低地の開発過程に関わるものである。さらにダッカに関する文献集、BLASTの調査報告書の2冊の英文（うち1冊はベンガル語併記）単著もある。

今回主査をした野間晴雄と氏は、1990年代に野間がJICA専門家としてバングラデシュに滞在中から調査の便宜や情報提供などをうけてきた旧知の間柄であり、その交流は20年以上に及ぶ。母国バングラデシュの大学には課程博士の制度しかないため、氏の学位取得の道は閉ざされていた。氏から論文博士として学位請求論文を関西大学大学院へ提出したいという希望が5年前に述べられ、ダッカ大学時代の指導教授で、かつ私の長年のベンガル農村研究の共同研究者であるロトン・ラル・チャクラボルティ（Ratan Lal

Chakraborty) 氏からも懇願され、関西大学での学位請求が実現した。

以上のように研究条件としては必ずしも恵まれない環境のなかで、氏はダッカ大学のもと指導教授らにたびたび助言指導を受けながら、バングラデシュ歴史協会などの研究団体とも積極的にかかわり、ベンガルデルタの開発史や土地紛争に関わる学術研究を行い、論文を執筆してきた。これをもとにした提出論文は、英語で A4 版 352 頁、約 16 万語 (words) の大冊で、公聴会での専門知識に関する応答も要を得たものであった。本学の博士授与資格は十分満たしているものと判断される。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。